公益社団法人
日本語教育学会
－世界の日本語教育―

（フィリピン／サンファン市）
2025 年 8 月

フィリピン人日本語教師の日本渡航経験を生かした現地での教育
－渡航経験が日本語教育観に与える影響－

檜皮萌々子（大阪大谷大学学部生）

１．プロジェクトの背景

私は将来、日本語教師として海外で活躍することを目指している。大学で日本語教育を学ぶ中で、非母語話者日本語教師（以下、NNT）の存在に関心を持つようになった。特に、日本での滞在経験を持つ NNT が、その経験をどのように教育実践へ活かしているのかに疑問を抱いたことが本研究の出発点である。

近年、海外における日本語学習者数は増加傾向にあり、東南アジア地域においても日本語教育の需要が高まっている。特にフィリピンでは、技能実習生制度や就労を背景とした実践的日本語教育の重要性が指摘されている（国際交流基金　2023）。その中で、現地日本語教育の役割はますます重要になっている。日本滞在経験を持つ NNT は、日本社会や文化を体験的に理解している点で大きな強みを持つと考えられるが、その経験が具体的にどのように教育観や指導内容に影響しているのかについては、十分に明らかにされていない。

本プロジェクトでは、フィリピン/サンファン市の送り出し機関 YMAHEI TRAINING AND ASSESSMENT CENTER CORPORATION（以下 YMAHEI）に所属する日本滞在経験のある NNT を対象に調査を実施した。

２．本プロジェクトの目的

本研究の目的は、日本滞在経験を有するフィリピン人 NNT がその滞在中に得た経験をどのように意味付け、それを教育実践へどのように活かしているのかを明らかにすることである。特に、日本での生活や就労経験が教師自身の教育観や指導方針にどのような影響を与えているのかに着目し、経験と実践との関連性を検討することを目指した。

単に「日本を知っている教師」という側面にとどまらず、渡航経験が学習者への指導内容や学習者理解のあり方にどのように反映されているのかを考察することを、本プロジェクトの課題とした。

３－１　プロジェクト全体のスケジュール

本プロジェクトでは、事前準備・現地調査・事後整理の三段階で進めた。渡航前には、先行研究の整理およびインタビュー項目の作成を行い、調査目的を明確化した上で現地入りした。

現地滞在は 8 月 21 日から 9 月 4 日の 2 週間で、前半は送り出し機関の概要把握と授業見学、中盤は日本滞在経験を有する NNT へのインタビュー実施。後半は、追加インタビュー及びインタビュー結果・教材整理、授業参加にあてた。

帰国後は、録音データを文字化したものを分析し、項目化した。以上のように、段階的に調査を実施し、計画的に研究を進行した。

３－２　現地での活動内容

現地では、授業観察、インタビュー、教材研究、そして教師・学習者との交流を通じて、日本語教育の実態を多角的に把握することを目指した。

授業観察では、技能実習生として日本渡航を目指す学習者を対象としたクラスを見学した。授業では文法や語彙の指導に加え、日本の職場を想定したロールプレイや、実際の生活場面を想定した会話練習が多く取り入れられていた。教師は自身の日本滞在中の経験を具体例として挙げながら、あいさつの仕方、質問の重要性、日本特有のマナーなどについて丁寧に説明していた。

インタビューでは、日本滞在中に経験した成功や困難、帰国後の意識の変化、そしてそれらが現在の授業にどのように反映されているかについて詳しく聞き取った。調査は半構造化形式で行い、語りの内容に応じて質問を発展させた。これは、調査対象者の経験や語りを重視する質的研究の立場に基づくものである（伊藤　2009）。特に印象的だったのは、日本で経験した戸惑いや失敗が、単なる個人的体験として語られるのではなく、「学習者への助言」という形で再構築されていた点である。例えば、自身が職場で経験したコミュニケーションの行き違いや文化的誤解を具体例として示し、同様の状況に直面した際の対処法を授業内で共有していた。渡航経験は知識の増加にとどまらず、指導姿勢や学習者理解にも影響を与えていることがうかがえた。

また、教材研究の一環として、YMAHEI の NNT の紹介で国際交流基金が主催するオンライン教材解説会にも参加した。そこでは、『いろどり　生活の日本語』について活用方法や指導上の工夫が紹介されており、現地教師も積極的に参加していた。解説会後には教師同士で意見交換が行われ、日本の教育動向を取り入れようとする姿勢が見られた。さらに、YMAHEI の授業では、教師自身が作成したプリントなどの補助教材も確認した。そこには日本での体験談や注意事項が具体的にまとめられており、渡航経験が教材開発にも反映されていることが分かった。

加えて、学外においても教師や学習者との交流の機会を得た。食事の場などの対話の中では、授業内では語られにくい悩みや、日本語教師としての葛藤についても率直な意見を聞くことができた。学習者からは、日本渡航への期待と不安の両方が語られ、教師が精神的な支えとしての役割も担っていることを実感した。このように、授業観察、インタビュー、教材研究、そして現地での人的交流を通じて、渡航経験を有する NNT がどのように経験を教育実践へと結びつけているのかを具体的に把握することができた。

４．プロジェクトを通して得られた成果

本プロジェクトを通して得られた最大の成果は、日本滞在経験がフィリピン人 NNT の教育実践に具体的かつ実践的な形で反映されている実態を明らかにできたことである。

授業観察やインタビューを通して、渡航経験は単なる経歴や付加的な要素ではなく、授業内容そのものを構成する重要な基盤となっていることが確認できた。特に、日本での戸惑いや失敗の経験が、学習への助言や注意喚起として再構築されている点は、本研究における大きな発見であった。教師自身が経験した文化的誤解や職場での困難は、抽象的な「文化理解」の説明ではなく、具体的な場面を想定した指導へと転換されていた。

また、教材研究やオンライン研修への参加を通じて、現地教師が継続的に専門性向上を図っている姿も確認できた。

さらに、学外での交流を通じて、教師が単なる言語指導者にとどまらず、渡航を控える学習者の精神的支えとしての役割も担っていることを実感した。日本社会を実際に経験した教師だからこそ伝えられる言葉があり、それが学習者の安心感や信頼につながっている様子がうかがえた。

本研究では、日本滞在経験が教育観に与える影響を理論的に整理してきたが、今回の現地調査によって、その影響が具体的な授業実践、教材開発、学習者対応の在り方にまで及んでいることを実証的に確認することができた。渡航経験は単なる知識の増加ではなく、指導姿勢や学習者理解の深化へとつながる重要な要素であることが、本プロジェクトを通じて明らかになった成果である。

５．今後に向けて

本プロジェクトを通じて、日本滞在経験を有する NNT の実践を具体的に観察し、その経験が教育観や授業内容にどのように反映されているかを確認することができた。しかし、本調査は限られた機関・対象者を中心とした事例的研究であるため、今後は調査対象を拡大し、地域や教育機関の違いによる比較検討を行う必要がある。特に、渡航経験の有無や滞在形態の違いが教育実践にどのような差異をもたらすかについて、より体系的に分析していくことが課題である。

また、今回の活動を通じて、NNT の専門性は日本語能力の高さのみで評価されるものではなく、「複数文化の経験」や「学習者と同じ立場を経験したこと」にも根ざしていると強く感じた。今後は、母語話者・非母語話者という二項対立的な枠組みにとらわれず、教師の多様な背景を強みとして捉える視点をさらに深めていきたい。

将来、日本語教師として国内外で教育に携わる際には、今回の調査で得た知見を活かし、学習者の将来を見据えた実践的かつ支援的な指導を行いたいと考えている。渡航経験をどのように教育へと還元するのかという問いは、他者の事例としてだけでなく、今後の自身の実践にも関わる重要な課題である。本プロジェクトは、その出発点となる貴重な学びの機会となった。

参考文献

・国際交流基金（2023）「国際交流基金　日本語教育　国・地域別情報」
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2023/philippines.pdf
（閲覧 2025 年 8 月 20 日）
・伊藤勇（2009）「質的インタビュー調査の再概念化」『福井大学教育地域科学部紀要』64，42035－42055https://files01.core.ac.uk/download/pdf/61343772.pdf?utm_source=chatgpt.com
（閲覧 2025 年 12 月 20 日）